

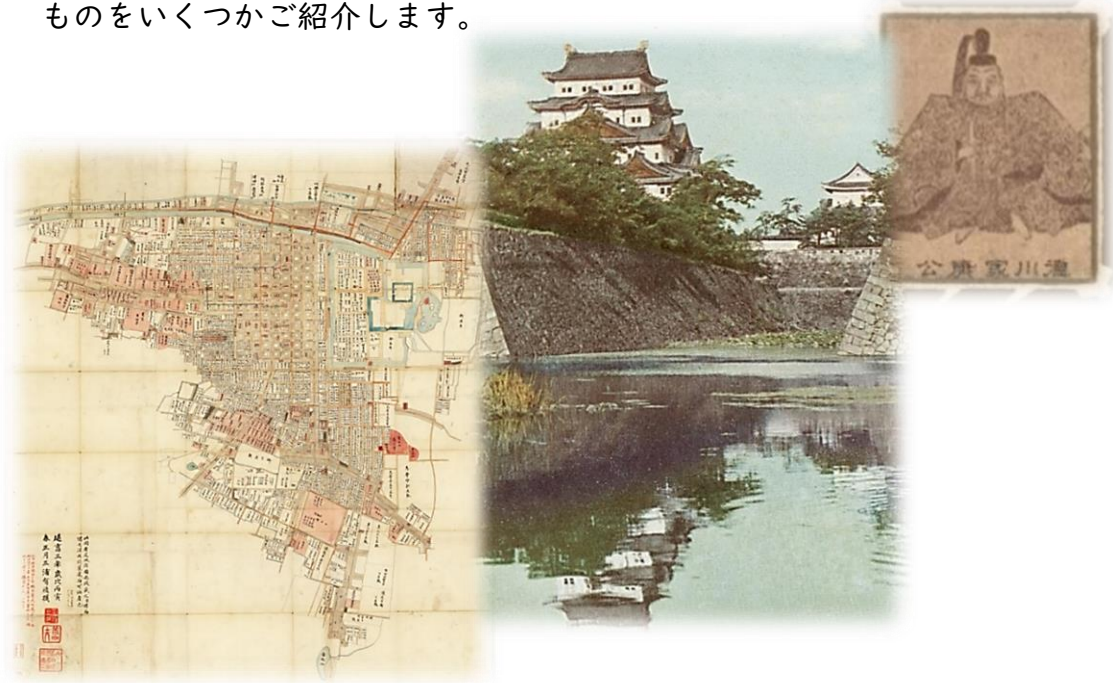
いまさら

# 家康

名古屋と家康の関係は、幼少時代の人質生活から始まります。幼少時代の家康（竹千代）は熱田の豪商・加藤家に1年間幽閉され、織田家の菩提寺・万松寺でも人質として過ごしました。

その後 関ヶ原の戦いに勝利した家康は、1610（慶長15）年、名古屋城築城を命じ、尾張徳川家の拠点として名古屋の地を選びます。これまでの中心地・清須から町ぐるみの引っ越し「清須越」を行い、家康が作り上げた碁盤割の城下町は今の名古屋のまちづくりの原型となっています。

NHK大河ドラマ「どうする家康」はこの展示期間中に最終回を迎え“いまさら”ではありますが、当館所蔵の資料の中から名古屋と家康に関するものをいくつかご紹介します。



## 〈展示資料の紹介〉

### 人質時代

#### 張州雑誌 NA294/39/7

竹千代(家康)は人質として今川家に送られる途中、護衛役の田原城主・戸田氏の裏切りにより敵将である織田信秀に届けられました。信秀から竹千代を預けられた熱田の加藤図書助順盛の娘が竹千代の世話をし、慰めに遊んだ雛人形が今も加藤家に伝来しています。

#### 亀山志 名古屋万松寺史 SOA1/39

徳川家康は竹千代と名乗った幼少時代、織田家の菩提寺であった万松寺で数年間人質となって暮らしました。また万松寺は、1610（慶長15）年名古屋城築城にあたり、徳川家康の命によって現在の大須に移転しています。

### 名古屋城築城・清州越・まちなみ整理

#### （尾州）徳川家系図 市12-51

尾張徳川家の系図です。家康は十男頼宣に駿河を、十一男頼房に水戸を、そして九男義直に尾張の土地を分け与え、将軍家を補佐させました。これが後の紀伊徳川家、水戸徳川家、尾張徳川家のいわゆる「御三家」のはじまりです。

#### 金城温古録 市13-240

名古屋城の築城は1610（慶長15）年に家康が命じました。当時はまだ大阪・豊臣家の脅威が残っていたころ。江戸幕府を守るため、両者の間に位置する東海地方に“とりで”を築く必要があったのです。この資料はそれから200年以上後に編纂された、名古屋城の百科事典です。

#### 名古屋城下（尾張国町村絵図） NA295/291

家康は名古屋城築城とともに城下町の整備も行ない、城の南側は碁盤の目のように縦横に直線的に区切られた「碁盤割」となりました。太平洋戦争の空襲で町全体は焼失してしまいましたが、その区画や通りの名前などは残っており、名古屋のまちなみの原型がつくられました。

## 宝生院記録 市5-74

宝生院とは大須観音のことで、歴代の住僧が多くの資料を書写・収集してきたことでも有名です。もともとは現在の岐阜県羽島市にありましたが、1612（慶長17）年、徳川家康の命令によって、名古屋城下への移転が決まりました。木曾川の洪水から、貴重な資料を守りたかったためではないかと言われています。

## その他

### 桶狭間村合戦記 河オ-13

【大高城 兵糧入れ】

桶狭間の戦いにおいて、今川勢であった元康(家康)は敵方に包囲された大高城へ兵糧を入れるという任務を無事成し遂げました。

### 松平氏八代墳墓 在大樹寺 温故-17

桶狭間合戦で主君・今川義元を喪った家康は、菩提寺である岡崎の大樹寺にある先祖代々の墓の前で自刃を図ろうとしましたが、住職に止められ思いとどまったといひます。

### 難波戦記 河ナ-88

徳川家康が旗印に用いたキャッチフレーズ「厭離穢土（おんりえど、またはえんりえど）欣求浄土（ごんぐじょうど）」は浄土信仰の基本とされる言葉です。「御旗本合戦附扇子御指物事」にその由来についての記述があります。

### （愛知県社）東照宮之図 別0A1-20

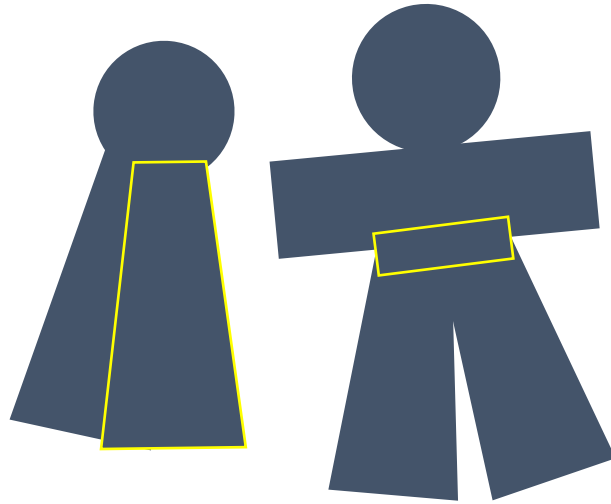
死後神格化された家康が祀られたのが東照宮です。久能山東照宮（静岡）と日光東照宮（栃木）が有名ですが、各地の徳川一門や大名が独自の東照宮を望み、競って東照宮を建てました。

豆

知識

#### 豆味噌と溜 S0A5/137

当時としては長生きの75歳（満73歳）まで生きた徳川家康は、「麦飯」と「豆味噌」を好んで食べていました。



表紙の資料（右から）

「織田信長公・徳川家康公・豊臣秀吉公 名古屋古代地図」（部分） 愛 14-01

「大名古屋美観…中京の誇り金城堀に影を映じて」 名 19-02

「名古屋城下図」 市 20-152

\*いずれも名古屋市図書館デジタルアーカイブ  
「なごやコレクション」にて閲覧できます。



《令和5年12月9日(土)～令和6年3月14日(木)》

**名古屋市鶴舞中央図書館**